

## 竹内好論

### ～ナショナリズムと奴隷の論理～

宮内広利

#### 目次

- 1 今、なぜ、ナショナリズムなのか
- 2 アジアと日本
- 3 日本イデオロギー批判
- 4 近代主義とナショナリズム
- 5 進歩と反動
- 6 「近代の超克」論議
- 7 方法としてのアジア

#### 1 今、なぜ、ナショナリズムなのか

1990年代の社会主義圏の崩壊は第二次大戦後の冷戦下の秩序を破り、誰もが抱いていた戦後の秩序感覚を一挙に吹き飛ばしてしまった。冷戦構造が解体して、従来のように米ソどちらかに依存していれば安全保障も経済もなりたつという考え方が一挙に崩れてしまったのである。冷戦の終結とともに米国の主導する世界秩序の経済的、イデオロギー的「脱領域化」が、デジタル思考による世界情報の同時化と手を携えて世界を覆い、主権国家の安定性をゆさぶりはじめた。その結果、市場原理が貫徹されるようになると経済的にも立ち至らなくなる国が出てきて、自分の国は自分で守るという姿勢が濃厚になったのである。このため、自分の国は何なのかという問いかけをつうじて、ナショナル・アイデンティティの再構築をしているなか、あらたにナショナリズムが台頭してきたのである。いわば、グローバル経済は、「私」の空間を裁断し原子化させたその反動で、国家として統合と共同体の同一性を求める「公」の空間を再発見させることになった。

わが国のナショナリズムの噴出には、そのほか直接的には、尖閣列島、竹島の領土紛争をはじめ、TPP問題などいろいろな原因がからんでいるが、なにより中産階級の崩壊による資産と所得格差がひろがり、階層的な二極構造が露出してきたことに最大の原因があるようにおもえる。それによって国民的一体感を支えていたナショナル・アイデンティティが亀裂をおこしはじめた。グローバル資本主義が市場の調整装置を作動させることができないまま、国民を主体とした国民国家のシステムを侵害するようになったため、弱肉強食の資本主義の狂乱に対抗するものとして、ナショナリズムで応えることになったのである。これは明治国家が築いた国民国家、戦後憲法にもとづく国民国家に続いて、第三の国民国家構想といえる。

これは見方によっては日清、日露の戦争のあと、第一次世界大戦頃の国民国家同士が対峙していた状況に回帰したとみえなくはない。事実、明治から大正時代にかけては、わが国が列強を真似、帝国主義としての政治体制の基礎固めをはじめた時期に当たっているが、あらたに形成された産業資本主義の強権による合理化の浸透につれ、殺伐とした孤独

な都会的生存競争と差別化の波が並行しておとずれていたのである。つまり、人々の意識のなかにおいても、片や帝国主義・資本主義社会の変転するイメージに同化しようとする人々と、多くの疎外された個我意識の原子化の拡大がパラレルに進行していたのである。当時、国内外においてポーツマス講和にからむ日比谷暴動、アメリカの排日運動、足尾・別子銅山の暴動、赤旗事件、伊藤博文の暗殺、大逆事件などにおきていた。橋川文三は当時の青年層の意識変化を次のようにたどっている。

《要するにこの時代における新時代の青年をめぐる環境を簡単に図式化すれば、一方に赤裸々な野望と利害の動機によって運動する帝国主義的世界像がはじめてハッキリと生活意識の地平に見え始めた反面（それはこの時代には、なかならず「人種戦争」というイメージをともなってあらわれていた）、他方では国内における社会変化のため、個人の定型的な生活意識の解体が広範に始まっていたということである。前者がかりに遠心的な欲望体系のヴィジョンを開発したとすれば、後者はむしろ求心的な自我の追及を必然化する関係であった。》『昭和維新試論』 橋川文三著

支配層においてもこの相矛盾する文明の結果に対する危機意識が胚胎し、現在において階層分化と空洞化に対しておこなわれようとしていると同じく、ナショナリズムによる再編成がおこなわれようとしていた。それはのちの昭和の超国家主義の台頭の予感を秘めたものであったのである。

橋川は日清戦争の前と後とは日本人の心性に大きな変化がおきたとみなしている。これが個人の遠心的な欲望体系と求心的な自我の追及の分裂といわれているものの内実であるが、彼はそれを高山樗牛の国家主義から個人主義への豹変に象徴させている。この転換には「内観的反省」のプロセスが介在した。つまり過剰なまでの痛切な自己嘲笑の意識にとらわれ、自己の内面生活の崩壊を読み取る悲痛な自己告白がみられるというのである。これは現世からの離脱へ方向づけられていたものであったがゆえに、現実社会へのイロニーにみちた批判がなり立っていたのである。つまり、明治国家に理想を求めた自分を冷笑し、自己否定をおこなっているのであるが、この樗牛の後に続いた自然主義文学者の心象風景を先取りしているという橋川の論理は、わたしたちの周りを取り囲む覚めた自己批評と文脈をおなじくするものではないかとおもう。このような心象風景は現在のナショナリズム台頭の基盤と正確に照応しているのではないか。

現在のナショナリズムの主体に関して小熊英二は、「サヨク」「人権」「朝日」「北朝鮮」「韓国」「中国」へのアンチを共通言語にして、市民運動に似た緩やかな結合によって、「癒し」を求める最近の若者の意識動向について分析している。それによると彼らに共通しているのは自分の現在おかれている現実と言葉との乖離が、イロニーとしての現実批判の形をとっていることである。これは明治の後半から大正にかけて支配した「内観的反省」の態度が隔世遺伝したかのように映る。覚めた自己批評が言葉をさまよい求めたあげく、実体のない架空の共通言語の反復を成立させているのである。ナショナリズムは一足飛びに表面化したのではない。それまでに潜在的に鬱積した感情が個人の孤独な意識をとおしてでてきたのである。ナショナリズムの問題は、こういう主体の成立の問題をぬきにしては解釈できないのである。

わたしがあらためてわが国を含むアジアの国々のナショナリズムの主体の問題を考えてみようという気になったきっかけは、尖閣列島にからむ日中の領土問題の対立であった。いわば日米間の対立や摩擦は、いままで常識のように流布されているか、猜疑心に囲われて馴れ合いのように誰かれの意識にもものぼっているのだが、対中国関係での対立の問題が、およそ論理的な見方からすれば、このような混乱した形で表面化したのは、戦後初めてのことだとおもう。こういう対立の構図を一番に政策課題に取り込んだのは保守政党であり、今後、国防論の見直しや憲法の非戦条項の見直しまでみすえて、ナショナリズムの締めつけを強化していくことはまちがいない。なぜ、日中関係の問題がわたしたちに新しい驚きを与えたのか考えてみると、まず第一に、最近の中国の急速な経済的發展が土台にあることに気づく。つまり、中国の社会主義という上部構造をもった資本主義が膨張態勢にあり、ナショナリズムが急速に高まったという事情である。もちろん、ここでいう中国の社会主義というのは形容矛盾そのものでしかなく、上部構造と下部構造の捩れとは表向きの話で、実際は、資本主義的な近代国家の埒外にあるものではない。つまり、近代資本主義を一巡りしてきたわが国と、隆盛華やかな近代中国の利害対立にともなういがみあいとして表面化したことになる。このような状況をふまえると、明治近代化以降の歴史のふりだしにもどって、ナショナリズムの問題に正面から向き合うことが必要になってきているのである。この意味において、戦後、わが国や中国のナショナリズムとその主体との距離測定をおこなった竹内好の業績が注目されるのである。

## 2 アジアと日本

竹内好が、アジア＝東洋の中でわが国を位置づける際の方法としたのは、東洋のヨーロッパ近代に対する「抵抗」の歴史であった。そして、抵抗を問題にするかぎり、東洋諸国の「主体性」のあり方が浮上する。ヨーロッパ近代の波に対して東洋の諸国はどのように抵抗し、主体性をもったかもたなかったかという視点である。竹内は、戦後まもなく、東洋の近代化はヨーロッパ近代に強制されたという言い方をしている。現在ではごく当たり前の常識におもえるのだが、そのメカニズムはひたすら、ヨーロッパの側の事情にあるという点に照明をあてているのが注目される。

ヨーロッパの東洋への進出が資本の意志なのか投機的な冒険心の結果によるものか不明であるが、ともかくヨーロッパ近代が内部の封建的なものから自己を区別する必要にせまられたとき、不断の自己更新をするために東洋を必要としたというのである。その際、ヨーロッパの自己拡張的ということが自己保存的な本能と重ねられた。異質なものにぶつかって逆のみずからの根拠を確認できる意味で、ヨーロッパがヨーロッパであるためには東洋へ侵入しなければならなかったのである。その際、東洋はヨーロッパに対して抵抗を試みたのだが、その抵抗でさえ東洋がますますヨーロッパ化する契機になったにすぎなかったのである。

しかし、19世紀の後半になってから、東洋の持続的な抵抗がヨーロッパの自己分裂をまねくようになった。ヨーロッパは東洋を包括したが包括しきれないことを感じはじめたのである。ヨーロッパがそれをどう受けとっていたにせよ、それでも東洋における抵抗は

持続し、抵抗を通じて東洋は自己を近代化しようとした。だが、この抵抗によって敗北は不可避におこり、東洋はたびたび心の傷を負わざるをえなかったのである。そうしてヨーロッパは一步ずつ前進し、東洋は一步ずつ後退していく。その結果、東洋にとって敗北はただ一瞬の敗北におわらず、敗北を忘れることに対する抵抗を敗北感にまで膨れ上がらせることになった。

《東洋には、本来にはヨーロッパを理解する能力がないばかりではなく、東洋を理解する能力もない。東洋を理解し、東洋を実現したのは、ヨーロッパにおいてあるヨーロッパ的なものであった。東洋が可能になるのは、ヨーロッパにおいてである。ヨーロッパがヨーロッパにおいて可能になるだけでなく、東洋もヨーロッパにおいて可能になる。もしヨーロッパを理性という概念で代表させれば、理性がヨーロッパのものであるばかりでなく、反理性（自然）もヨーロッパのものである。すべてヨーロッパのものである。》『中国の近代と日本の近代』 竹内好著

こういう東洋の悲惨さや無力感を追体験するには、竹内は、ヨーロッパの一步前進と東洋の一步後退をみつめるみずからの視線を内省し、結局、相対論であるかのように装わざるをえなかった。ここで竹内が踏み迷っているのは、東洋とヨーロッパの二元性の歴史というものではない。いわば、世界歴史の中に入ること自体が東洋には拒まれていたのであり、東洋の質量は天秤の上へのせられてヨーロッパのさじ加減によってきめられていた。いわば、ヨーロッパを主体とする東洋との相補的な関係としてその渦中に東洋がひきいれられたといえるのである。なぜなら、東洋にとってヨーロッパにおいて東洋を自覚したとするなら、東洋の敗北感そのものもヨーロッパ側の視覚にたよらざるを得なかったからである。

なぜ、東洋はこのような屈辱に甘んじなければならなかったのか。ここから竹内はヨーロッパの知の風景と東洋のそれを見比べている。それによると、ヨーロッパにおいては、精神は発展する自己運動をおこなっているのに対して、東洋にはこのような精神の自己運動はなく、新しい言葉が次々うまれてくるが、どれもがまもなく風化して墮落（ダラク）していく。たとえば、個人においても、いままでの自分の主張を内在的に検討し直し精神的土台からくつがえし、あらたな展望に結びつけるような発展はおこなわれなかった。特に、いち早くヨーロッパの思想を吸収しようとしたわが国においては、いままで言葉の矛盾に当面し、言葉が自己発展していった例をみいだすことができない。

その理由として竹内があげているのは、もともと、文化や精神が実体的に外部のモノとしてとりあつかわれているのではないかということだった。それは与えられるものとして、モノのように存在しているのである。その意味で、東洋諸国のなかの優等生であるわが国は、もっともヨーロッパ的でなく東洋的であるとみなさざるをえなかった。東洋のなかでもっともヨーロッパ文化への抵抗が少なく、精神を内在化して理解しなかったわが国の特殊な風土が理由にあげられた。

そういう主体性の欠落は、現実と観念の矛盾に関してあきらかだった。ヨーロッパでは観念が現実と矛盾すると、それを矛盾する問題の場そのものを超えていこうとする。ところが、わが国においては観念が現実と不調和になると、以前の原理を捨てて別の原理をさ

がしはじめる。観念はおきざりにされたまま原理は捨てられる。古いものを捨て、すぐ新しい言葉を求めて現実に合致させてしまう。スターリンがだめなら毛沢東、毛沢東がだめならマルクスというようにである。そこでは観念の失敗を意識化することは絶対にありえないから、日本イデオロギーには失敗がない。それは永久に成功し、それを無限に繰り返しているだけなのである。たえず新しいものをもとめ、新しい学説をさがすことであり、新しい流派をさがすことになる。ここから竹内は、日本文化を支配する根底のメカニズムにまでせまっていく。

竹内が疑問視しているのは、まず、思想が一度も現実を動かしたことがないわが国においては、現実を変革しようという観念すら欠如していたことである。これはわが国の思考形態を縛っている純粹観念論でしかないが、こうした観念論者をさして、竹内は奴隷の合理主義と呼び批判する。かつてわが国はヨーロッパや中国から文物を輸入した経験をもっているから、そういう受け渡しが永遠に続くとおもっているのである。文学や学問がどこからかやってくるモノとして理解されているのである。明治以降になると、わが国はヨーロッパに追いつけ追い越せと、ヨーロッパの文物の輸入が日本文化の優等生によっておこなわれた。東洋におけるヨーロッパ文化輸入の優等生になったのである。だから、わが国の文化は構造的に優等生文化だといわれている。そして、秀才は鈍才たちの上にそびえ、限りなくピラミッドに近い形となっており、東洋における優等生はわが国の優等生によってピラミッドをつくったのである。

《おくれた人民を指導してやるのが自分たちの使命だ。おくれた東洋諸国を指導してやるのが自分たちの使命だ、となる。これは優等生根性の論理的展開である。だから主観的にはかれらは正しい。そしてそこから、自分たちが優秀なのはヨーロッパ文化を受け入れた結果であるから、その自分たちの文化的ほどこしを、おくれた人民は当然受けるであろうし、また受けるべきだという独断的な優等生心理を反映した結論がうまれる。》『中国の近代と日本の近代』 竹内好著

おくれた東洋の国々やわが国の民衆である劣等生には、優等生にすぎるとはか生きる術がないのである。竹内によると、このような優等生文化の論理に対して、魯迅は正反対の解決策をみいだした。魯迅は、自分は古い人間で劣等性＝奴隷（ドレイ）であることを自認していた。だが、魯迅には劣等生のコンプレックスがないから、一番過酷な人生を生きているという実感があつた。奴隷は奴隷を支配する優等生の力添えを得ないでは生きていけないのであるが、魯迅には自分が奴隷であることの意識があり、しかも安易に救われようとする意識がないために、あとには絶望しか残らない。奴隷であることを拒否して同時に、解放の幻想をも拒否する一番過酷な道を選んだことになる。この絶望こそ抵抗の母体と呼ばれるものだ。

その点、幻想を夢みるわが国のヒューマニスト作家なら、魯迅の絶望が植民地的後進性と映るかもしれない。しかし、実際は、魯迅からはわが国の「先進的」な日本文学が解放の幻想にとらわれた楽観主義に見えるのである。魯迅は解放を与えられるものとして求めている。与えられないのは抵抗するためだ。抵抗を拒否すれば与えられるが、与えられるという幻想を拒否する能力を奪われる。つまり、墮落するのである。

竹内が墮落するという言い方で、魯迅とわが国の文化を対照しているのは、魯迅においては文学が抵抗し、それが伝統化しているということを指しているのだとおもえる。伝統化しているというのは思想が時と場所を得て、内面的に正確に測られていることをさしている。主体によって知識や文化が意識内部に取り込まれ、時間として蓄積されているのである。それにひきかえ、わが国の文化風土の頭脳をのぞきこめば、古いものと新しいものが葛藤せず、過不足なくそのまま寝かされている状態にある。古い層の横に新しい層が折り重なっているのである。主体性を介在させた抵抗や断絶がないから、いわば、すべてがあると同時に、すべてがないのも同然なのである。

それは竹内によると時間が空間化されているわが国の文学者、芸術家の特徴とされているのである。昨日の自分と今日の自分とは別であってもかまわない。昨日は戦争に協力したが、今日は平和に貢献するという身替りの早さを容認する寛大さがあるのである。それは文学者、芸術家が支配権力に迎合するからではない。わが国の文学者、芸術家は主観的には権力に対する抵抗意識が格別弱いわけではないが、共同体的雰囲気への圧力に対して抵抗力が乏しいのである。しかも、わが国の権力の場合、直接むき出しの形ではでてこない。あらゆる支配層をつうじて間接的にしか圧力がかからないのである。権力の中心たる責任主体が多面的なものだから、抵抗する対象が不明なままなのである。このため、抵抗がなし崩しの結果になり、解放の幻影を抱きやすくなるのである。

竹内にとって「先進的」なヒューマニズムを拒否した魯迅は、いかなる意味においても墮落したことはなかった。主観によって解放の幻影をみるものは、奴隷の主人になったときに奴隷根性が完成する。奴隷の主人が解放の幻影であるからだ。竹内は日本文化の特質を奴隷根性と呼んでいる。奴隷は奴隷であるだけでは奴隷ではありえない。みずからの内なる奴隷性から目をそらし、奴隷の主人になることを夢見たときからほんものの奴隷に、そして、奴隷根性におそわれることになるのである。

《魯迅は、前近代的な植民地社会に生れて、そのような自分を自覚し、それを超えるために苦しんだ文学者である。そのようなものとして、魯迅を、私たちは日本文学の立場で読まなければならないのであるが、同時にそのことが、魯迅を読むことを困難にしているようである。なぜなら、日本文学は、自分の植民地性を忘れたがっているからだ。奴隷が奴隷の身分を自覚すれば、脱却への第一歩だが、奴隷が奴隷に甘んじ、あるいは、奴隷の身分を忘れたがり、あるいは、自分が奴隷の主人になる夢を見ているかぎりには、脱却の行動を起こすことはできない。奴隷と奴隷の主人はおなじものだ、と魯迅はいった。彼は奴隷の主人になろうとしたのでなく、人間になろうとしたのだ。》『魯迅入門』 竹内好著

わが国は近代の出発点においてヨーロッパに対して決定的なコンプレックスを抱いた。そこから猛烈にヨーロッパに追いつけ追い越せと励み、自分がヨーロッパに近づくことが奴隷の身分から脱却する道と考えた。つまり、東洋という奴隷の主人になることで奴隷の境遇から脱出しようと試みたのである。こうした優越意識と劣等意識の並存する主体性の欠如した観点からみると、きっと他の東洋諸国が後退的にみえるにちがいない。しかし、竹内は日本文学にくらべると中国文学が遅れているように映るのは、自らの反転した似せ

絵をみているからだという。

古いから抵抗するがゆえに、魯迅のような文学者は日本社会からはでてこない。しかし、竹内には古いことで抵抗することがそのまま新しいことになる手本として魯迅がいることが希望にみえている。彼は日本文化の型を転向文化と呼び、中国文化は回心文化と呼んでいる。日本文化は革命という歴史の断絶を経験しなかったため、過去を断ち切ることによって新しく生まれ直すため、古いものがよみがえる過程がなかったのである。つまり、歴史が書き換えられなかった。日本文化のなかでは新しい者はかならず古くなるが、古いものが新しくなることはなかった。これは辛亥革命と明治維新の比較においてわかるとされている。辛亥革命は失敗したがゆえに成功したが、明治維新は成功したがゆえに失敗したという逆説が生じたのである。

竹内は魯迅をうみだした風土というものを考えあわせて日中両国を比較し、次のように述べている。わが国はアジアにさきがけて近代化したため、一見、はるかに近代国家の条件をそなえているかにみえるが、本質的には封建的なものが強く残っている。それにひきかえ、中国は文化が古いために、保守的な伝統が巣くっており、抵抗が激しく近代化が遅々としてしか進んでいないが、それだけに改革のやり方が徹底的であり、明治維新とくらべて革命はより確実なのではないか、というように。

### 3 日本イデオロギー批判

ある進歩主義者Aが、日本の若い娘さんが戦時中の読み物を読んでいる光景をみて、「軍国調のむしかえし」ではないかと危機感をあらわにした文章について、竹内好は嘔みついでいる。娘さんが戦後になっても文化的、民主的な読み物を読まないことがAには不満なのだ。それだけでなく、Aは戦後のエロ・グロが蔓延している出版事情にも不満である。しかし、竹内によると、その告発が誰に向けていわれているのか、出版社に対してなのか娘さんに対してか一切不明であり、文章の成立条件が欠けているとおもわざるをえなかった。こういう無意味さは役人の文章と似かよっており、これを竹内は文章の官僚化とみなしている。そこにこそ日本文化の構造的なあり方がしめされているととらえる。一見すると、娘さんの読み物に不信感を抱いたというだけなら役人的な文章ではない。良書に親しむことを忠告するのは、それ自体としては善意のあらわれにみえるからだ。だが、竹内はこんな役人的な文章でないものほど、役人にだまされ、役人的になるという。その理由としていわれているのが、民衆は民衆であるために官僚化されるという逆説である。

それはどういうことなのか。Aは不満をもらすことによって、しらずしらずに自分ではない立場にすべりこんだのである。つまり、Aは自分が役人的であることに気がつかぬほど非A的なのであるが、それはAの指導者意識によるものだとするのである。本来、A的であるべきAが指導者意識に被われて非A的になっており、しらないうちに虚構と現実の二重化が生じているのだ。そればかりか、わが国においては役人に反対するためには自分が役人的になるよりほかに方法がない。これはAが不可避に文部大臣のような口ぶりになってしまっている理由である。ここではAの口ぶりは内心は居丈高でありながら、それでいてへりくだった口調になってしまっているのである。なぜ、同じAの意志は二重になってしまい指導者意識をもってしまうのか。本来、Aと非難されている娘さんは同じ立場に

立っていたはずであるにもかかわらず、その間に指導者意識が介在して両者を別けてしまったのである。わが国において指導者意識の原型は軍隊にあった。そこにはヒエラルキーがあり、指導者意識はそのヒエラルキーのあいだから姿をあらわすのである。

《ヒエラルキーの頂点へ向う動きから、各瞬間に指導者が飛び出すように、日本文化は構造されている。日本人は、指導されるか、指導されるのがいやなら自分が指導者になるよりほかに生きられない。むしろ、指導者は同時に被指導者であり、被指導者は同時に指導者であるように、目に見えぬ糸につながれている。「リンカーン」という映画に出てくるような、人民のあいだからうまれる指導者は、日本ではうまれにくいし、うまれる根拠もない。

》『指導者意識について』 竹内好著

わが国を近代化させようとした国の指導者たちは、西欧からたちおくれた資本主義を世界の水準へ近づけようと努力した。そのために、外国の文物を直輸入してその成果を誇った。その性向がわが国の文化の構造と日本人の心理構造を形づくったのである。一高一帝大という教育コースが日本的な立身出世主義を如実にものがたっており、これが指導者意識の発生する地盤になっていた。それは体制側だけではなく、反体制側の意識にもはたらいていたのである。人民のあいだからこの点の否定の意識がおこらないで、逆に人民を誘導する方向で、ピラミッドの頂点をのぼす方向にゆがめられたのである。このため、思想が新しくなるたびに、自由民権運動は大陸侵略の手先に横すべりし、大正から昭和にかけての左翼運動はいわゆる新官僚になって戦争を遂行する役割を担ったのである。竹内は日本では反体制運動までが国の威信をかけたオリンピック競争になっていると述べている。

竹内はこのような日本文化の構造化が進んだのは明治10年前後ではないかと推測している。つまり、明治維新の革命が西郷隆盛の反乱に対して勝利をおさめたとき、つまり反革命をつぶしたときにできあがったというのだ。つまり、日本にはロシアや中国にみられたようにアジア的な野蛮な抵抗がなく、反動が弱く抵抗が弱かったそのぶんだけ革命が歪められたというのである。

わが国の進歩主義も日本のイデオロギーの特徴のひとつであり、それはいわば、歴史の断絶をとまわらない進歩主義であった。つまり、奴隸的日本文化の構造の上に乗っている進歩主義にはかならなかった。それは明治維新において否定の契機を見つけることがなかった構造に由来しているのである。だから、わが国においては、進歩主義者は支配者と一緒になって反動攻撃をおこない、人民に上から革命を命じることになる。彼らは人民を組織しようとするが、それは自分の命令をきかせようとするだけであるから、結果、権威をすげ替えるだけに終わってしまうのである。「民主主義」という表皮を押しつけるだけであるため、民衆は進歩主義者の目のとどかないところで、隠れて反動的な本を読まなければならないのである。

進歩主義者Aのような人物は日本的指導者のタイプを非常にはっきり映し出している。ほんとうは指導に不向きな人物なのだが、こういう人物こそそのまま指導者的になることが日本的なところだといわれている。このような指導者意識の理由は、民衆の意識に根をはっているのだが、そこでは指導と被指導のタテの人間関係しかないからである。自分が一高一帝大へゆくか、そうでなければ一高一帝大に劣等意識をもつかの二者択一しかない

のである。また、奴隷かそうでなければ奴隷の主人になるしかないのである。

竹内によると、Aは進歩と退歩のおもてむきの価値判断しかないから、娘さんの内面にふみこんで、「軍国調」の読み物を読んでいることの意味がわかっていないし、わかろうともしていない。もしかしたら、娘さんは戦争で被害に遭い、その本に忘れようとしても忘れられない思いが詰まっていたのかもしれないのである。忘却するだけが心の傷を治すとは限らない。その本によって、忘れようとしても忘れられない真実の目が開かれたかもしれないのである。民衆はバカだから東条にだまされた、ほうっておいたらまただまされるとAはおもったのだろう。それでAは「危うい」という気持ちに掻き立てられたのだが、娘さんはだまされたおかげで、東条の「軍国調」に替わった「民主主義」の指導者をも信用しないくらいに賢くなったのである。その賢くなった点を見つけ、今度は、Aからすると「軍国調のむしかえし」にみえるのである。そのようにみられた娘さんは、指導者のすべてが悪だと悟っているにちがいないのである。この娘さんのような内発的な心の空隙をもつことが、ほんとうは竹内のいう抵抗ということの具体的中身なのである。

ここで語られていることに民衆とインテリの差異というものを感ずることはできるかもしれない。しかし、わたしたちはそれ以上に竹内とともに、民衆意識の中に巣くった奴隷根性の痕跡を負性（マイナス）の遺産としてみいださざるをえない。それは優性意識と劣等意識が同在していることだ。一高一帝大をでて立身出世をすることは、西欧の文物をいち早く取り入れることだった。そして取り入れた文物は民衆に対して啓蒙することを第一の任務とこころえた。それは、反体制の側においても変わりなかった。西欧からもちこんだ「民主主義」、「社会主義」は反体制側の啓蒙の対象になったとき、呪術的に使用された。この場合でも、体制、反体制にかかわらず民衆を高めから導き、手本を示すという心性に変わりなかった。しかし、これらエリートたちも進んだ西欧を無批判に取り入れたことで劣等意識をまぬがれなかった。そして、彼らはその劣等意識を自らの心の内に飲み込み否定するのではなく、そのぶんだけ劣等意識を払拭するために、あたかも自分の意志であるかのようにピラミッドの上位にたち、民衆に訓戒を垂れ、未来の世界をバラ色にさししめしたのである。これが立身出世したエリートにみられる第一の奴隷根性である。

そして、二つ目の奴隷根性は民衆側のものだ。一高一帝大コースからこぼれおちた民衆においては、自らの劣等意識をバネにして、少しでもエリートに近づこうと忠勤に励み、エリートの口マネをして、自分とはちがう自分に懸命にのしあがろうとするのである。これこそ民衆は民衆であるために官僚化されるという逆説である。民衆においてもみずからの屈辱感を嚙みしめるより先に、奴隷の主人になることが求められた。エリートと大衆は、一見、立場が逆になっているようにみえるが、実は、両者ともに本来は異なるはずの優性意識と劣等意識が奇妙な具合に同一人物に同在しているのである。奴隷は奴隷であるだけでは奴隷ではない、奴隷の支配者になろうとしたとき、奴隷の境遇を脱出できるような夢を紡ぐとき、本物の奴隷になるという奴隷根性をあらわしているのである。

竹内はこういうわが国の特殊な奴隷根性に型どられた啓蒙主義を批判する。それは、さらに、日本共産党批判にもつながっていく。

《要するに、外に対する気がねを捨てて、足もとを見ろ、ということなのである。偶像崇拜をやめて現実の分析から出発しろ、ということだ。そうしなければ、いつまでたっても、

歴史的に形成された日本人のドレイ的精神構造を主体的に内部からつかむことはできない。それがつかめなければ、日本の革命という共通の課題も発見できないだろう。理想的な共産主義という架空のイメージを主観に描いて、そこから現実を見おろしている日本的共産主義者の優等生根性と、それに劣等感を抱く民衆のあいだには、いつまでたっても、人民の意志を集中した革命の主体が出てくるための共通の場は設定されない。≫『日本共産党論』 竹内好著

ここには三つ目の奴隷根性が顔をのぞかせており、日本共産党の権威主義、官僚主義が批判されているのである。共産党という反体制のエリート集団から下部に向け、民衆が道具に利用されるという神話のカラクリがときあかされているのである。共産党は民衆の方を見向きもせず、偶像崇拜をおこない、形だけの戦略論、戦術論の書き換えでお茶を濁しているだけで、それに大衆がついてくるものだという先入観に縛られているのである。これでは大衆は権力と党から二重の意味で奴隷だと決めつけられているに等しい。

共産主義は、最初、わが国の革命を第一の目標に掲げていた。日本の革命には共産主義が最良の方法であるという判断をもっていたはずだった。ところが、運動の過程において外圧によって内面は歪み、やがて頭でっかちになったあげく共産主義を偶像化した分だけ、次第に目的と手段が乖離して、手段であったはずの共産主義が目的化し、日本に共産主義を広めることが日本の革命であると考えようになったのである。革命の主体であるはずの共産党が自己目的化し、共産員が増えることや選挙で投票が増えることが、日本の革命であるかのような錯覚が生じたのである。その際、民衆はたかだか党に箔をつける道具にまでなりさがっている。こうして奴隷的共産主義の基礎づけがあたえられたのである。しかも、それが主観的にはあくまで思想に忠実な態度であるかのように観念されているのだ。善意が善意であるほど悪意になる。革命的なものが革命的であるほど反革命的になる。こうなるのは日本文化の奴隷的構造を破壊するという本来の革命の主題が忘れられているからだ。

#### 4 近代主義とナショナリズム

わが国のように支配的であることが被支配的であり、被支配的であることが支配的になるという逆説的な支配と被支配の関係があるとすれば、もっとも反動的なものが進歩的にもなりうる。そういう観点にたつて、竹内はナショナリズムの問題が近代文学史をひもとく上で大切な要素になっていると主張した。

≪マルクス主義者を含めての近代主義者たちは、血ぬられた民族主義をよけて通った。自分を被害者と規定し、ナショナリズムのウルトラ化を自己の責任外の出来事とした。「日本ロマン派」を黙殺することが正しいとされた。しかし、「日本ロマン派」を倒したものは、かれらでなくて外の力なのである。外の力によって倒されたものを、自分が倒したように、自分の力を過信したことはなかっただろうか。それによって、悪夢は忘れられたかもしれないが、血は洗い清められなかったのではないか。≫『近代主義と民族の問題』 竹内好著

竹内によると、戦後に復活した近代主義は戦争の期間のことを棚上げし、血塗られたロマン主義の悪夢を忘れて、民族の問題がまるでなかったかのように、突然与えられた平和の意義を民衆に滔々と説明しはじめた。近代主義は戦後の空白状態において、ある種の文化的役割をはたしたのは事実だが、マルクス主義者を含めた近代主義者たちは、ともかく血塗られたウルトラ・ナショナリズムの民族主義を避けてとおった。戦争責任論においても自分を被害者にみだてて、ナショナリズムのウルトラ化を自分の責任外のものとみなしたのである。戦前、戦中の強権政治によって抑えられていた鬱屈から一挙に解放されたと感じたのだから当然なのかもしれないが、竹内はこのような近代主義の態度は戦後だけの出来事ではなかったことを指摘する。戦前の「日本ロマン派」そのものが近代主義のアンチテーゼとしてあらわれたということを忘れられてはならないのである。そのアンチテーゼとは文学の人間認識において民族をひとつの要素として認めよという主張であった。近代主義が民族主義との対決を避けたことが、逆に民族主義を硬化させ、ウルトラ・ナショナリズムとして噴出したとみなしたのである。

竹内によれば、明治以降、近代主義は日本文学史のなかの支配的思想だった。その近代主義は民族の問題を思考の回路から排除して、近代文学の最初からその民族を切り捨てる傾向があったことに対して自覚的ではなかった。このような近代主義は近代日本文学史のうちに最初からあったものではなかった。近代主義が支配的になったのは『白樺』派の抽象的自由人の人間描写があらわれてきたときである。この場合、その抽象的な人間観の確立により近代主義は、近代と民族の二つの要素の相克を認めて止揚しようとするのではなく、一方の民族の要素を卑しめ抑圧してしまったのである。それは『白樺』派の延長上にうまれたプロレタリア文学において頂点に達した。

プロレタリア文学は階級という要素を移入したが、影としての抑圧された民族のことは念頭になかった。反対に、民族を抑圧するために階級という言葉をも万能にした。ところが、この民族を切り捨てた姿勢に無理があったのである。その結果、その背伸びしたうしろめたさを隠していたぶんだけ、のちに転向者の間から極端な民族主義者を輩出することになったのである。共産党の幹部があらためて民族の重要性を確認したというようなコメントをだして転向してしまったのである。これはもともと人間を抽象的人間や階級的人間で措定することで、具体的な完全な人間像との関連が絶たれていたことに問題があったのである。一切の具体的人間の全体像をすくいとらなければならない文学の役割を忘れて、部分的人間をもって人間の全体像にすりかえてしまったからである。捨てられた側から人間の全体性の回復を求める声があがるのは当然だった。

民族意識は抑圧に対する反発からうまれる。抑圧されなければ表面にあらわれることはないが、要素として絶えず存在するのが民族の問題である。日本ファシズムの支配権力がこの民族意識を眠りからさましてウルトラ・ナショナリズムに利用したことは批判する必要があるが、明治期にあった素朴なナショナリズムまで否定して抑圧するのは正しくない。竹内は素朴なナショナリズムは正当権を主張することができるとしている。それは「正しいナショナリズム」の復権ということなのである。「日本ロマン派」をさかのぼれば岡倉天心へいき、子規や透谷へもいきつくのである。もっといえば、明治維新を準備した江戸期

の本居宣長、吉田松陰の思想までさかのぼることができる。素朴なナショナリズムが、やがて権力支配に組みこまれていった過程をとらえることなしに、ナショナリズムの問題を考えることができないとする。

橋川文三は近代ナショナリズムの起源を求めて江戸時代後期に焦点をあて、藩主周辺の上級武士、本居宣長など知識人、下級武士、豪商、一般農民の別にそれぞれのナショナリズムの色分けをしている。近代ナショナリズムは嘉永六年(1853)、ペリー提督の黒船来航以後とされているが、当時の日本人を封建支配層＝大名、武士、中間層＝豪農、一般庶民＝農民に別けてそれぞれのナショナリズムを取りあげている。そのなかで吉田松陰の思想においては、「忠誠」とは武士の主君に対するものよりも大きな価値観を含んでいた。「忠誠」とは藩主にただ仕えるものではなく、時としてその命にさからっても真の忠誠というものがあり、それが究極的に天皇に向けられていたのである。その点で、松陰は国民意識の端緒をとらえていたとされている。竹内は、その埋もれたナショナリズムの系譜を発掘しようとしなかったマルクス主義者を含む近代主義者が、やがて、「日本ロマン派」の反動を許したとしているのである。

ただし、ここで注意しなければならないのは、なぜ、素朴なナショナリズムがウルトラ・ナショナリズムとして登場したかという疑問である。竹内の解釈では、近代主義によってナショナリズムが強力に抑圧されその反動がおおきかったため、ウルトラ・ナショナリズムが躍り出たということになっているが、この点はまちがっている。近代主義や進歩主義が民族の問題のゆくえをみうしなしたことにはちがいないが、ウルトラの契機は近代主義とともにあったからである。近代主義に抑圧されただけでなく、ブルジョア社会が高度化するにつれ、近代主義と手を携えてナショナリズムも近代化していたのである。つまり、ナショナリズムは近代主義を背面にひきずっていたために、膨大な国民的エネルギーを引きだしたのである。これは日本文化の根底に横たわる問題であるが、ナショナリズムは、より近代社会に沿うものと素朴なナショナリズムの二重性をもち、一方の近代化の進行とともにその大きさを蓄えていた要素が一举に噴出したのである。この観点をふまえないと、戦時中のファシズムが軍部のなかで、社会ファシズムの統制派と農本ファシズムの皇道派で勢力争いをした理由がわからないのである。おそらく、近代主義はこのとき、素朴なナショナリズムをイデオロギー的に反転させることによって、ナショナリズムの質を変えることに成功したのである。

戦時中の苦い体験をもとに、戦後、竹内はナショナリズムの掘り起しを目的にして「国民文学」を運動化しようとした。「国民文学」は、階級とともに民族を含んだ全人間性の実現をしなければならないとし、民族の伝統に根ざさない文学はありえないとした。都合の悪い部分を切り捨てては、「国民文学」とはいえないという認識にたっていた。

そこで彼は、「国民文学」という概念を文学における独立という意味で、文学における封建性及び植民地性の排除と同義に使っている。そして、また、当時の文学状況を植民地文学という言い方をしている。

≪文学における植民地性は、民族に媒介されない世界文学の表象によってはかることができる。今日のような完璧な表象の投影があらわれたことは、今日が完璧な植民地になったことのあらわれだ。私は個々の事象についていうのではない。作家なり批評家なりが、も

し私小説的方法によらなければ、方法どころかイメージまで外国に借りなければならぬ一般状況をさしているのである。つまり、創造性を失っているわけである。文学における独立とは、この創造性の回復を戦いとすることでなければならない。そして、創造の根元が民衆の生活そのものにあることは、ほとんど自明だから、創造性を回復するための努力は、文学の国民的解放を目ざすことと実践的には一致するわけである。≫『文学における独立とはなにか』 竹内好著

文学の独立性を希求することは、米軍占領下にあった時期の特殊性ということにみなされがちであるが、竹内の被占領感はそれよりもずっと前の戦前の『白樺』派の登場までさかのぼる。国民の民族としてのナショナルな感情を忌避して、抽象的個人を中心とした文学観やプロレタリア文学の階級的人間観まで含めて、植民地文学を指すとしているのである。つまり、文学理論としての独立性が確立されていない今までの日本文学のすべてに対しての不満が述べられていることになる。

これだけを見ると文化的独立ということから竹内は出発しているようにみえるのだが、彼の論旨がつかみにくいのは、その文化的独立の問題とわが国が政治的に米国の被占領下にあることと、それからの解放と政治的独立の問題とどう関係してくるかという点である。いわゆる「国民文学」論争と呼ばれるものがあったが、それはこの点を中心にして展開された。文学が政治的独立の手段として利用されないのかどうか、野間宏、安倍公房、伊藤整、蔵原惟人、臼井吉見などとの論争のテーマになったのである。そのなかでわかったことは、竹内は文化的独立のみをめざしているのかということ、どうもそれだけではないのである。それは民族の独立は政治の課題であるとともに文学の課題として本質的に重要なものであると言い方になってあらわれる。文学者も含めて日本国民の独立はひとつの国民的悲願であり、日本国民を内外からしめつけている一切の軛の集約点が、今日の民族的隷属の状態であるとしているからだ。民族の独立は日本人の願望のミニマムであり、同時に結果的にはマキシマムであるとも述べているのだ。つまり、竹内にとっては政治的独立がこのとき問題になっており、決して文化的独立をめざすだけではなかったのである。

ただし、野間などとおなじく、政治的独立を求めることにはかわりないとしているのだが、政党に従属した政治的立場で国民を一方の方向だけにすすめていく文学の立場は危険だと言っているのである。政治の手段としての文学のあり方を問いつめていることになる。それでは、竹内にとって政治的解放と文化的解放をつなぐものはなにかということが問題になる。その答えが封建的な遺制からの個人の解放である。いわば、「国民文学」においては、社会的な解放が課題にならざるを得ないということなのであり、文学の国民的解放とはこのことを指している。ここで竹内は政治的解放と文化的解放をつなぐものとして社会的解放のスローガンを導き入れるのである。このことが、日本の独立という政治的解放がそのまま政治勢力に利用されないための保証になっており、文化的解放にむかう結節点になっているといえる。

竹内には『ナショナリズムと社会革命』という著述がある。そのなかで明治期のナショナリズムが漱石にも鴉外にも透谷、独歩の中にもあったと書かれている。そういう明治人の東洋的ナショナリズムはそれ以降うずもれてしまったが、そのナショナリズムの心情は素朴であり、健康でもあった。だが、もっとも注目されるのは石川啄木のそれであった。

啄木が最後にたどりついたのは「社会主義的帝国主義」という言葉であった。つまり、社会革命をナショナリズムと結合させるという試みなのである。この啄木の思想はプロレタリア文学に引き継がれたとみなされているが、ここで引き継がれたのは社会革命のみで、ナショナリズムの方はひきつがれなかった。そのことで、プロレタリア文学はのちにウルトラ・ナショナリズムから手痛い復讐をこうむらなければならなかった。これをみると、竹内が「国民文学」論争で主張しようとしたことは、こういうナショナリズムと社会改革を結合する試みであったことがわかる。政治的ナショナリズムのみだと偏狭なナショナリズムにおちいる。社会革命と結合してはじめて国民的な解放の文学になるというのである。

「国民文学」は階級文学や植民地文学を否定するものである。「国民文学」は階級とともに民族を含んだ全人間性の完全な実現なしには達成できない。民族の伝統に根ざさない革命というものはありえない。それをしないのが進歩主義であるとするれば、そのような進歩主義は口先でいかに革命をとらえようとも、真の革命にとって敵ということになる。

しかしながら、こういう文学理論の実効性は、当時、米軍による被支配占領を受けていた政治的現実における絶望感や不安感の反映によるものであるとしても、文学の価値を政治的解放や社会的解放の観点からみているかぎりにおいて、もはや文学論としては失効しているようにおもえる。おそらく、文化的ナショナリズムを主張する点において竹内の論旨は筋がとおっていた。文化における西欧の手法の直輸入がおこなわれたことに関しては、竹内はもっとナショナリストであるべきだった。だが、政治的解放を文学のテーマと一体化したとき、プロレタリア文学運動が階級史観を中心においてすすめていったと同様な閉鎖性をもたざるをえなかったとおもえる。事実、「国民文学」論はまもなく萎んでしまった。

竹内の文学観は「政治と文学」の関係の問題として、魯迅評価の上で次のようにあらわれた。

《文学は無力である。魯迅はそう見る。無力というのは、政治に対して無力なのである。それは、裏から云えば、政治に対して有力なものは文学でない、ということである。これは文化主義だろうか。確かにそうである。魯迅は文化主義者である。しかし、この文化主義は、文化主義に対立する文化主義である。「文学文学と騒ぐ」こと、文学が「偉大な力を持つ」と信じること、それを彼は否定したのである。文学が政治と無関係だと云おうとするのではない。関係のないところには、有力も無力も生ずるはずがないからである。政治に対して文学が無力なのは文学がみずから政治を疎外することによって、政治との対決を通じてそうなるのである。政治に遊離したものは、文学ではない。政治において自己の影を見、その影を破却することによって、云いかえれば無力を自覚することによって、文学は文学となるのである。》『魯迅』 竹内好著

ここで、まず、竹内がいつているのは魯迅のいう「無用の用」としての文学の無力感のことである。文学は行動ではないから政治に対してなんら働きかけをもたないというのである。ところが、魯迅はこのような考え方の上にたった単なる文化主義は認めることはできなかった。なぜなら、文学が文学として自立するのは、政治において文学が疎外した影を「破却」した場合のことであるから、政治と文学は二律背反であるけれども「矛盾的自己同一」関係にあるというのである。この場合、「矛盾的自己同一」というのは、政治と文

学が同じ平面にあって、互いが鏡のように映し合っている関係のことである。ただし、鏡像には互いの姿が逆倒して映っている状態を指している。

いわば、政治の一举手が文学の挙手としてあらわれる相補的な関係をしめしている。竹内が魯迅に対してこういう見方をするようになったのは、魯迅が辛亥革命をおこなった孫文の姿に永久革命者をみたことによって、永久文学者を自分に重ねたことが影響していたとおもわれる。孫文は辛亥革命の際にも、「革命いまだ成らず」と革命の未完を嘆いたのである。二律背反であるけれども「矛盾的自己同一」であるとは、革命と文学の問題を、切迫感をもって取りあげざるを得なかった魯迅の拍動を感じさせる言い廻しを、みずから刻みつけた竹内の文学観の方向をしめすものになった。

わが国では、戦後、「政治と文学」論争がおこなわれた。平野謙、荒正人と中野重治のあいだにかわされた論争のことである。この際、平野は政治と文学に関して、プロレタリア文学運動のなかの文学の政治に対する従属関係を根拠にして、政治の文学の二律背反から文学の優位性を問題にしたのである。プロレタリアートの勝利のために貢献するものが善であり、その反対は悪だとする評価の基準が、文学的価値よりも政治的価値を重んじるプロレタリア文学運動を支配していたのである。その政策と芸術性との抱き合わせの構造がマルクス主義文学にほかならぬとするなら、そのような構造を吟味しなおすというのが平野の主張の根本にあった。それが芸術性をゆがめるとの視点にたつて平野は批判したのである。

この場合、魯迅を評価する竹内にしても、「文学は政治に従属する」といった毛沢東の言葉を借りて説明するかぎり、限界があった。たとえ、善意に解釈するとしても、文学は社会や政治意識に規定されるというのは、確かにそういえると消極的に追認できるだけだ。「だから、従属しなければならない」と積極的に解釈しなおすなら、政治主義の看板を表にだしたことになり誤りにおちいるのである。文学の価値を政治的主張にかぶせること自体が、あきらかに文学の逸脱なのである。なぜなら、文学の価値はその裏づけとなる現実社会の価値以上でも以下でもないからだ。その現実を無視して、文学に別の価値をもとめるかぎりにおいて、その文学論は文学の面からも批評の面からも歪んでしまうのである。つまり、テーマ主義におちいつてしまうのである。

文学は、現実政治が占領期であるなら、植民地文学であることをまぬがれない。それに目をつぶり、テーマとして独立した人間像を追いかけること自体、近代主義がナショナリズムの問題に目をつぶったと同じ錯誤をまねくのである。その点が野間宏などとの論争の中途半端さがめだってしまっている理由である。本来、プロレタリア文学は、文学そのものの価値に政治的価値を導入しようとしたことによって蹉跌したのである。それは階級問題をテーマにしたことによっておこったのではない。たとえ、民族の問題を政治的テーマにしたところで、破綻はまぬがれなかったといえる。

## 5 進歩と反動

竹内は、もし、わが国がナショナリズムを欲すると仮定した場合、戦時期のウルトラ・ナショナリズムを避けて、ナショナリズムだけを手に入れようとしたら、唯一、逆に、ウルトラ・ナショナリズムのなかから真実のナショナリズムをひきだしてくるべきだ

と述べている。つまり、反革命のなかから革命を引き出してくることであるが、これは次のような断定とも結びついている。

《進歩と反動は相関的であり、互に転移する。この場合、進歩が具体的状況に応じて反動化するという側面は、マルクスやレーニンによっても強調されている。しかし、これはキリスト教的終末観と関係があるのではないか。マルクスやレーニンによって強調されていない反動の進歩への転化の側面を、もっと強調する必要があるのではないか。この方がアジアにふさわしい。》『アジアにおける進歩と反動』 竹内好著

当時、進歩の観念は揺らいでいた。ここで竹内は、アジアにおける進歩とはなにか、反動とは何かの難問に答えようとしているのである。イデオロギーでこわばっている進歩の観念を解放することが必要であるといっているのである。進歩の指標はマルクス主義によって共産主義を目標とする進歩史観に支配されてきた。そして、共産主義を唯一の指標として選ぶなら、孫文やガンジーはある場合は反動にされたり進歩にされたりした。評価が両極に引き裂かれてきたのであり、価値基準が一つだからどちらかに割り切るより仕方がなかったのである。

そういう一元化を正すため多元的な価値基準の必要性がでてくる。ここで竹内は丸山眞男の提出した進歩の基準について言及している。丸山が①テクノロジーの進歩②大衆意識の勃興③アジアのナショナリズムという三点をあげているのである。これに対して、竹内は、ナショナリズムは他と並立すべきものではなく、《もっと異質なもので、並行現象という取りあつかいは適用されない。むしろもっと本源的に、そこにおいて進歩が可能になるか不可能になるかを問うべき性質のもの》という反論を述べている。つまり、ナショナリズムは進歩や反動の根元になる要素だとみなしているのである。ナショナリズムはテクノロジーの進歩や大衆社会の成立のように近代資本主義の影響をうけたものとは別の扱いをしなければならないとしているのだ。ナショナリズムという概念そのものが、西洋近代社会の落とし子であるとしても、アジアにとってはまったく別の意味をもっていることを強調していることになる。

わたしたちの一般的な尺度では、ナショナリズムは西欧的な近代ナショナリズムをもってしか理解することができなかった。つまり、ブルジョア革命によった誕生した政治的国家は市民社会からの離反をとおして、一方では、ゆり戻しのように不可避に政治的国家同士の相克や市場獲得の植民地争奪競争の過程から帝国主義化することで、国内経済社会の矛盾を回避する近代国家群があり、もう一方では、近代国家の相克の谷間から、植民地諸国の民族ナショナリズムの解放闘争が澎湃と沸きあがる二面性の図式にかぎられてきたのである。そして、このような図式の延長上には、マルクスのテーゼのように、成熟段階に入ると徐々に政治的国家はその機能を失い、市民社会の中に埋め込まれるはずであった。その場合、政治的国家の存在そのものがナショナリズムと同義に存在し、死滅をも約束されたものであった。竹内がこのような公式が通用しないナショナリズムの様相をとり出した意義は大きいといえる。

もうひとつ竹内が丸山に反論しているのは、丸山の基準は中和的で漸進的な進歩だけを想定しており、主体的な革命の要因がないということだった。それに対してアジアの情勢

は、現在進行中の革命であるから、革命の契機を含むものでなければならないというのである。さらに、わが国の立場としてアジアの革命にどうかかわるかという要因も加わるべきだと述べている。この点において、竹内独自の考え方が滲み出ている。なぜなら、かつての大東亜戦争について、わが国のアジア侵略は、一面、アジアの民族運動を刺激する契機になったことはまぎれもない事実とするのである。わが国は反動化したけれども、朝鮮、中国、東南アジア、インドの民族運動を背面から後押ししたという指摘である。それなら、アジアのなかでわが国が果たした役割をみのがすことができないというのである。わが国がいま、アジアのナショナリズムに連帯するべきだといっても、過去の民族的使命感を無視して結びつきのコースを発見することはできない。そこをどう乗り越えるかが問われてくるという。

竹内の主張は、第二次大戦後、アジア諸国がナショナリズムによって民族独立をはたし勃興していた時期のものであるが、そのかぎりでは進歩史観への批判という点に関して的を射ているとおもえる。そして、ナショナリズムに重点をおいた点に関してもおなじである。しかし、丸山のような多元的な進歩の観念に対して、進歩と反動の基準をあげたこと自体を問わない点において、進歩と反動の一直線の流れを肯定し、進歩史観に一定の役割を割り振ったことにならないかということについては疑問が残る。これは丸山の提言が急進的であろうと、漸進的であろうと同じであるはずであり、思想の色分けをしている点において変わらない。進歩と反動の価値観が反転したとしても、進歩的とか反動的とかそのものの歴史的出所を問わないかぎり、その進歩と反動の系列化はまぬがれないのだ。

それともうひとつは、「進歩的ナショナリズム」と「反動的ナショナリズム」の区別をすること自体に疑問をもたざるを得ない。丸山眞男はヨーロッパの近代民族国家にはもともと普遍主義（ユニヴァーサルイズム）というものがあったと述べている。はじめはローマ帝国であり、ローマカトリック教会と神聖ローマ帝国に象徴されるヨーロッパ共同体の理念が存在した。ルネサンスと宗教改革にはじまる近世民族国家の発展が、これら本来一なる世界を多元的に分裂させたのである。したがって、ナショナリズムの意識は初めから国際社会の意識によって裏づけがあったのである。それに対して、アジアはそういう統一性をもたないなか、ヨーロッパからの武力による圧力で強制的に開国をせまられたのである。その結果、ナショナリズムにおいてもアジアのそれはヨーロッパのそれとまったくちがった歴史的経過をたどったとされている。

《そこでは国際関係における対等性の意識がなく、むしろ国内的な階層的支配（ヒエラルキー）の眼で国際関係を見るから、こちらが相手を征服ないし併呑するか、相手にやられるか、問題ははじめから二者択一である。このような国際関係を律するより高次の規範意識の希薄な場合には、力関係によって昨日までの消極的防衛の意識はたちまち明日には無制限の膨張主義に変化する。そこにはまったく未知なるものに対する原始的な心情としての恐怖と尊大との特殊なコンプレックスが当然に支配する。…中略…最初から一つの共通した規範意識から出発したヨーロッパ・ナショナリズムに比して、東洋諸国のそれがナショナリズムの合理化、とくに国際主義との一応の均衡に到達する上に多大の困難を経験しなければならなかったのには、このような発生事情の相異が少なからず作用していることは

丸山のナショナリズム理解の中では「良いナショナリズム」と「悪いナショナリズム」という色分けがあり、おそらく竹内もこの点を認めて、進歩的ナショナリズムと反動的ナショナリズムの区別をしているものとおもえるが、アジアのナショナリズムがとおりのいっぺんの解釈をゆるさず曲折しているにしても、もともとナショナリズム自体、進歩的も反動的もなく、本質的にあらゆる民族国家と同義に歴史的に制約された概念であり、普遍価値概念として使われてはならないのである。まして、一般的に固有の歴史的条件をぬきにして、良いナショナリズムと悪いナショナリズムを腑分けすることはできない。竹内はアジアのナショナリズムの普遍化ということを考えているのかもしれないが、そのために、従来からの進歩的ナショナリズムと反動的ナショナリズムの根柢をなしているナショナリズム観を用心深く自分なりにあとづける姿勢がみえるのである。

わが国は西欧の進歩史観を無批判に導入して西欧的近代社会を後追いし、軍事的、経済的に西欧諸国に肉薄しようとした。しかし、竹内によると、これが進歩の過程で反動に転化した原因になった。明治維新の近代革命はやがて帝国主義へとすすみ、アジアを植民地支配に巻き込んだ。それなら、西欧的でない進歩もあるのではないかというものだ。もっといえば、わが国の近代化の陰画として、アジアにおける反動が進歩に近づく指標になるのではないかというのである。つまり、進歩史観の盲点こそアジアの体内に仕込まれていたということである。この点は、丸山眞男の次のような認識と合致している。

つまり、日本が明治維新による上からの革命に成功して、世界を驚かすスピードで帝国主義国家まで成長したのにひきかえ、中国の近代化は清朝内部の強大な保守勢力の前に屈服し、その結果、わが国はじめ列強帝国主義の集中的侵犯をこうむり、半植民地の境涯におちた。ところが、中国の支配層は内部的な編成替えによって近代化に失敗したため、日本をはじめ帝国主義列強に侵犯されたが、そのことがかえって、帝国主義支配に反対するナショナリズム運動に旧社会・政治体制を根底的に変革する任務を導き入れたという認識である。それはたとえば中共の革命をみると共産主義ではあるが、その中に中国の伝統的なエトスが含まれていることをみてもわかる。また、インドのガンジイズムの中にはテクノロジーに反発するものがあって西欧近代の価値観を基準にすると遅れた意味しかもたないようにみえるが、これらさえ、西欧の価値観を超える可能性があるのではないかというのである。さらには、アジアから西欧世界を変えていく原動力になるのではないかということになる。

西欧的な文明一元論は第一次世界大戦の頃から内部解体が進行していた。そういう地点から考えあわせるとなおさら、アジアには固有の歴史が刻まれているということがいえる。これが近代化について二つの道が、「良い近代化」と「悪い近代化」の見本があったということから導きだされた竹内の結論である。日本の近代化は西欧をモデルにして、追いつけ追い越せという心情を基調にしてきたのであり、そういう観点から見ると中国ほかのアジアの国々は遅々として進まないようにみられたが、厳密な内面性においてみると別の様相をもっていた。

わが国においては明治初期から脱亜論によって文明一元論が存在した。文明こそすべてであるという思想が近代化の原動力になった。この文明史観のイデオログは『文明論之

概略』を書いた福沢諭吉である。欧化と国粋が動と反動を繰り返しているが、福沢の設定したコースは日本国家の思想の中核を形づくっていた。その結果、西欧に起こった変化を敏感にキャッチすることができなくなっていた。アジアの興隆とともに西欧文明社会も変化していたのである。それを知らずにわが国は文明の名を借りて大国化して覇道をもとめるようになった結果、戦争をはじめ敗戦を迎えたのである。

そのことはナショナリズム観の二面性ということも影響してくる。わたしたちのナショナリズム理解においても西欧社会で通用しているナショナリズムの側面が強かった。資本主義の成長とともに植民地を侵食していくことがナショナリズムとして考えられてきたのである。ところが、西欧列国に侵攻されたアジアの国々は侵攻によって目覚めさせられたということは事実であるが、その抵抗は西欧のいうナショナリズムというものとは別の様相をもっていたのではないか。したがって、竹内の結論は、西欧の侵攻に対する抵抗の歴史をひもといてみると、一見、復古運動にみえる反抗においても一概に反動的とはいえないのではないかということになる。竹内はたとえをもって、こういう価値観の転倒について語っている。

《私は、無能な社会主義者よりは有能なファシストを遺産としてもつことを誇りたく思う。弱い味方よりは強い敵が頼りになるものだ。》『北一輝』 竹内好著

竹内の北評価は右翼と左翼が交差している地点にあった。つまり進歩と反動がぶつかり、しばしば逆になることがあるのを見ぬいていた。社会主義を日本におこすには外国直輸入にたよってはいけないのであって、北はわが国のナショナリズムの中をくぐりぬけ、社会主義を現実とどうマッチさせるかを考えたというのである。それとともに、北が中国革命とのかかわりから、アジアの伝統的なエトスをくみとる契機をもっていたとみているのである。

## 6 「近代の超克」論議

中国との先の戦争の記憶が薄れるなか、わが国の戦後は米国との関係に力を奪われ、大東亜戦争のもうひとつの当事国として戦争をした事実の反省と総括が思想的に全くかえりみられなかった。もちろん、靖国問題や従軍慰安婦問題の問題なら、ときどき泡のように政治課題になっては消えていくが、近代主義者、マルクス主義者、保守主義者を問わず、大東亜戦争の意味の根幹の部分については、まったくといっていいほど触れられてこなかったのである。たしかに、わたしたちの年代でも、戦中のスローガンである「八紘一宇」や「五族協和」、「王道楽土」は知識としては知っていたが、なぜ、そういう言葉がうまれてきたかを知らうとする前に、単に「天皇制ファシズム」という荒削りな範疇に一括りにされた上、すぐさま敗戦による莫大な死者や原爆の廃墟へと連想が飛んで、死者に拮抗するような重さをもたないと思ひ込み、それらの言葉は単なる幻想として始末してきたのである。それでもわたしたちが、幾分、アジアにおける戦争の問題を自覚的に眺めはじめたのは、戦後まもなく展開された竹内の中国論をとおしてである。

竹内の主張のひとつは、わが国の近代国家の形成から大東亜戦争にいたる過程における

事件や事変を網羅するには、ナショナリズムの問題を避けてはとおれないという問題意識であり、もうひとつは、それはアジアのナショナリズムとの関連においてとらえなければならぬということであった。つづめれば、竹内の主張は、本来、右翼ナショナリストの専売であったはずのアジアのナショナリズム、あるいは民族主義問題の装いを変えた提出ということにすぎないのだが、彼は戦中の同時代体験をもっているから、その答えを導き出すために迂遠な論理の階段を踏んでいるようにおもえる。つまり、竹内の場合、ナショナリズムの問題は火中の栗をひろうことにもなりかねない危険性をよく知っており、そのふんだけその論理の幅は限りなく狭くなっているのだ。ナショナリズムの由縁や性格づけのための理由がくねくねした論理にたどられることになるが、そこにこそ彼の長所があらわれていると考えなければならないのである。

竹内によると、当時の政治家や軍人だけでなく、戦前の文学者、哲学者だけでもなく、戦後の人々によってさえ戦争の意味がたどれなかったのはそれなりの理由があった。彼は正真正銘のファシストである大川周明さえも日華事変の解決不能性を知っていて苦悶せざるをえなかった証拠をあげたあと、次のように続けている。

「なぜ、解決されないのか。太平洋戦争の二重構造が認識されないままに忘れられようとしているからであり、さかのぼって言えば、明治国家の二重構造が認識の対象にされないからである。明治時代を一貫する日本の基本国策は、完全独立の実現にあった。開国に際しての安政の不平等条約の最終廃棄（関税自主権）は明治四十四年まで持ち越された。しかし一方、日本は早くも明治九年に朝鮮に不平等条約を押しつけている。朝鮮や中国への不平等条約の強要が日本自身の不平等条約からの脱却と相関的であった。この伝統から形成されたのが「東亜共栄圏」のユートピア思想であり、そのために「大東亜戦争」は不可欠の条件であった。」『近代の超克』 竹内好著

明治の近代化のうちにはわが国の国家構造のヌエ的な関係がからんでいることはまちがいなかった。それは復古と維新、攘夷と開国、国粹と文明開化、東洋と西洋という対抗軸の同時性ということであり、いわば、わが国の近代化のなかにはアジアの問題と西洋の問題が凝縮してあらわれていたのである。わが国が不平等条約の撤廃を要求したのはアジアとしての方法の自覚であったのだが、その同じ時期、朝鮮や中国に対して不平等条約を押しつけているのは、西洋近代の立場にたってであった。その二重性はあたかも双頭の蛇のようであったから、どちらかが尻尾を飲み込むようなことになる、先後どちらが頭かわからなくなるのは自明であった。そのため、蛇は、前に進んだり後ろへ後退したりと無限にジレンマを抱え込まなければならなくなる。

このわが国の近代国家の二重構造は、もとは西郷隆盛の征韓論にまでさかのぼって、国策の裏面に組み込まれていた。そして、このジレンマ解消の力学は、「大東亜共栄圏」というユートピア思想をうみだし、その結果「大東亜戦争」という結語に行きついた。竹内の文脈からおしはかると、それは欧米列強の力によって無理やり植民地化されてきたアジア諸国のなかでわが国が盟主として指導権を握り、欧米の利権を駆逐してアジアを開放するスローガンに込められたといえる。もちろん、理念とちがって現実の進行はそんなに直線に進まないから、竹内はその理由づけの中身は時間の推移とともに少しずつ盛り込まれた

内容の力点が変わっていき、公式の国策遂行スローガンどおりにはいたらなかったことを追跡しなければならなかった。

しかしながら、太平洋戦争が始まる前の当時の知識人にとって、日華事変の戦争状態が続いていることは中国に対する侵略行為であることは自明の事柄だった。それがわかっていながら、なぜ当時の共産主義者はもちろん自由主義的な知識人たちは、戦争に抵抗する勢力を結集することができなかつたのか、と竹内はあらためて問い直している。竹内は、その問いかけを通じて彼ら文学者、哲学者らの思想的枯渇の実体を暴くとともに、彼らの頭を悩ました戦争の定義づけをおこなっている。

竹内によると大東亜戦争は、植民地侵略戦争(中国やアジアに対する)であると同時に、帝国主義戦争(米英に対する)であり、この両側面は事実上一体化していたが、論理的には区別しなければならないとする考え方を取り出した。なぜなら、日本は中国大陸に対するとはちがって、米国や英国を侵略しようとして意図していなかったからである。それからいうと、当然、帝国主義が帝国主義に責任を負わせることはできないと結論づけられ、東京裁判に対する批判にもつながる。こういう結論の背景には、対米英戦争の開始された昭和16年12月8日の体験は、多数の国民がこの開戦を無条件に支持した事実によっても証明される。

12月8日にいたるまでには、暗澹とした平和よりも戦争の純一さの方がましだというような雰囲気や国民の体勢を占めていた。そして、おおかたの知識人も同様な見方によって思考を停止したのである。長いトンネルのような中国戦線の泥沼に辟易していた国民の目には、対米英開戦はある種の晴れやかささえもたらしたことは容易に想像できる。その当時、共産主義者の多くはすでに転向して内面的に屈折し、もはや現実の推移を追いかける力をもっていなかった。また、近代主義的な自由主義者でさえ拘束されており、その他の文学者、哲学者たちも、いちおうに思想的根拠を失った状態におちいり、開戦に対して異議を唱えたものは皆無だった。そればかりか共産主義者のなかには、ナチスへの嫌悪から独ソ戦においてはソ連側を応援しながら、そのことを日本の対中国戦線の虚偽性と結びつけて、太平洋での戦争が心理的なカタルシスを得るという倒錯した思考や知性の放棄にさえみまがう事態が出現していたのである。しかし竹内は、あくまでも戦争体系のなかから戦争体系そのものを変革する意図と実現のプログラムを提出する思想の所在にこだわっており、そのような大東亜戦争の思想的性格の定義の難しさのなかにこそ、ほんとうは戦争に対する思想的転機が隠されていたと考えた。

竹内は、雑誌『文学界』が太平洋戦争の開始からほぼ1年たった昭和17年9月、10月号に掲載した『近代の超克』と銘打たれたシンポジウムについて仔細に検討を加えている。彼はこのシンポジウムは戦前における最後の思想的営為と受けとり、長びく戦争状態を変える可能性をみようとした。この「近代の超克」という言葉は、それ以降、知識人をとらえ、やがてシンボルとして使われるようになる。保田与重郎を除いて当時の論客がほぼ揃った感のあるシンポジウムの出席者は、三つのグループで構成されていた。つまり、『文学界』同人グループ、京都学派グループ、日本ロマン派グループである。司会は河上徹太郎、出席者は西谷啓治、諸井三郎、鈴木成高、小林秀雄、亀井勝一郎、林房雄など13名である。

今日から見ると、「近代の超克」という課題は、さしずめポスト・モダンの呼びかけとも

同一視されかねないが、この討論が行われた背景はなんといっても対米英戦争の最中、しかも緒戦の戦勝ムードに酔いしれている時期であったことである。文学者の多くは開戦を無邪気に喜び、暗雲が晴れたように気持ちを高ぶらせていたのであり、このことを割り引かないと、とうてい彼らの思想の実質には届きそうもない。その一方で、それまでにわが国はすでに10年近くにわたって中国大陸で戦争をしており、太平洋戦争から戦争が始まったのではない事実である。このような陰影はここに参加したひとたちに共有されていなかったはずはないとおもえるのだが、竹内によると、皆アジア情勢に関しては驚くほど無関心であったとされている。そのことが、「近代の超克」に関する竹内の最大の問題意識にとれる。その場所では戦争一般の定義ではなく、どの戦争のどのような戦争の側面かが検討されなければならなかったはずなのだが、出席者のだれも「近代の超克」のためには戦争一般が不可欠であるというふうなおりいっぺんの解説しかできなかった。竹内はこのことにおいてすでに戦争理念の破綻をみてとった。

戦争理念、つまり、大東亜共栄圏を目指した大東亜戦争の理念は、一方でアジアを主張し、他方で西欧を主張する使い分けの論理にほかならないが、わが国はアジアの盟主を自認しながら、アジアに対する無関心と優越意識があるかぎりアジア諸国との連帯は望むべくもなく、相反する意識はたえず二足わらじで相手との緊張感に誘い、相互矛盾は拡大していった。なぜなら、アジアの盟主になることはアジア諸国の植民地解放運動を敵にまわすことになり、一方で、みずからアジアの原理を欧米に承認させなければならぬからだ。だが、わが国の実際のアジア政策の中身は、ほとんどアジア的原理を放棄しているに等しかった。したがって、その対アジア、対欧米両面においても、いずれ破綻をまぬがれなかったのである。竹内は、この破綻は欧米に対してはアジアであり、アジアに対しては欧米であるヌエの二重構造の結果であり、どちらにしても「永久戦争」の立場に帰着せざるをえなかったと考えた。つまり、戦前のわが国の国際的立場は振り子のようなもので、たえず、不安定で持続的な緊張と戦争を内包していたことになる。そのことに気づき、どういう手立てをおこなうことができるかがこのシンポジウムで試されていた。

しかし、ここで立ち止まって考えると、竹内の主張に対してある疑問が湧いてくる。欧米に対してアジアであり、アジアに対して欧米であることからくる永久戦争の論理は、わが国独特の環境によって生まれたものではないとおもえることだ。いいかえれば、先進国に対して後進国であり、より後進国に対して先進国であるわが国の二重性は、西欧近代の発展段階論をなぞったにすぎないのである。それはむしろ、より先進国、先進国、後進国、より後進国の序列を、時間軸をもとにピラミッドのように形づくられた資本主義の歴史事実であり、もとはといえば、西欧近代の歴史観の落とし子といえる。しかも、より先進国であるか、より後進国であるかという媒介項をのぞけば、あとには先進国と後進国の対立しか残らないから、各国がすべて近代化してしまうなら、竹内のいう永久戦争論は意味をなくしてしまうのである。少なくとも、大東亜戦争の論理は、復古や反動だけからできあがったものではなく、西欧の近代的な装いを背負い込むことで成立していた。事実、それは膨大な犠牲をはらって、敗戦は攘夷と開国、東洋と西洋という対立軸の無力化を証明した。

竹内は、大東亜戦争の思想体系を①総力戦②永久戦争③「肇国（ハツクニ）」の理想の三本の柱が一体化したものと想定し、戦時のあらゆる思想はこの「公」の思想との関係にお

いて距離感やバランスの上で展開したとみなしている。あの総力戦の時代は、一部の軍国主義者のみが戦争を扇動したのではなく、大部分の国民も戦争を歓迎していたからだ。その意味で総力戦の体制においては抵抗と屈服とは紙一重だったことになる。竹内のみとところ、この公の思想をもっともよく体現したのは京都学派の哲学者たちであった。彼らは「世界史的立場」としての日本の役割を太平洋戦争に結びつけ、それは日本人がみずから「世界史の哲学」を完成しなければならない危機意識と隣り合わせにした。そして、その世界史の哲学は西欧に対抗するわが国みずからの西欧近代的なものの否定、つまり、「近代の超克」そのものであった。そこで新たな世界的日本文化の創造という使命はそのまま、新しい世界史の原理を確立することであり、それは天皇制の原基ともいえる「肇国」の理想に求心する。

そして、そのイデーのための戦争は、人類の魂を浄化することにより、戦争は歴史をつくるもっともヴァイタルな力であり、近代が行き詰ったところにはどこでも戦争があるという戦争観にもとづいていた。そのような戦争は、講和や平和を目的とするものではなく、それらの次元を超えたものになり、この総力戦は戦争と平和という対立概念を止揚する創造的、建設的な戦争と位置づけられる。これらは開戦の詔勅を見事に解析し、解釈したことにつながる。だからこそ、ここにあらわれている思想は、公の戦争自体の論理の破綻をなぞることになったのである。また、当の戦争自体が目的化してしまうと同時に、戦争の目的そのものがみえなくなり、思想的混乱をもたらすことになった。ここにいたって、最初に述べたように戦争の解決不能性が露出してしまい、その点が多くの人たちにとって戦争の意味がたどれなくなった最大の理由なのである。ここまでが竹内の京都学派に対する大まかなイメージであるが、彼は京都学派を教義学と呼んでおり、戦争とファシズムのイデオロギーをつくりだしたのではなく、単に公の思想を祖述したにすぎないと評している。彼らの思想の力が現実を動かした事実はないとしたのだ。

《日華事変は解決不能であり、そのために解決の無期延期の手段として太平洋戦争がはじまった。したがって戦争は当然、永久戦争たらざるをえない。京都学派には永久戦争の紙の上での説明はできるが、解決はできない。そうならば「戦争反対」を叫ぶことで、あるいは戦争反対勢力を結集することで解決できるか。それはできるだろう。しかし、総力戦の中からどうやってその勢力を結集するか。どういう論理で戦争を平和に転換できるか。「和戦という低い対立」を観念上で超えるだけならば「絶対無」の哲学でできようが、それは問題にならない。思想が現実にはたらきかけるものとしての、その思想の論理は何であるか。これは戦争中について発見されなかったし、今でもまだ発見されていない。》『近代の超克』 竹内好著

わたしたちは竹内のこのような言葉に触れると、当時の総力戦の異様な雰囲気の中では、どのような思想であろうと無力であることを思いしらされる。それは京都学派のようにもっとも体系的な形而上学的思弁（思想）であろうと戦争を推進することも、逆に、戦争を抑止することも不可能なことにおいて実地に証明されたかにみえる。しかし、竹内の思想の主調色は決してペシミズムではなく、僅かな可能性かもしれないが、大東亜戦争の二重性にくさびを打ち込み、絡んだ糸のもつれを解く方法を模索していたのである。おそらく、

竹内の思想の行き着くところは、アジアの原理（ナショナリズム）と近代の原理を肌身につきあわせながら、近代化する方法の模索に集中していただろうことは予想できる。それに対して『近代の超克』のシンポジウムの結論が、「四分五裂で、実りを結ばないまま時局に押し流された無残さ」に終わったことに失望している。

「近代の超克」派の発言のいずれにも、求められていたはずの時局に面した個々の主体性の問題、あるいは人間の問題が抜け落ちていた。その事実の側面からいうなら、大東亜共栄圏の夢は現実に掠りもしなかったのである。アジアの原理（ナショナリズム）とは何か、西欧近代の原理とは何かもよくわからないまま、勝手に思い込んだアジアの大義を掲げて戦争は拡大していくにもかかわらず、思想でさえも戦勝気分によって浮かれ、判断停止したままだったからである。この場合、思想と現実の齟齬は、思想が人間の内面の原理をどの程度つかみ、現実の一步先に歩を進めているかにかかっていたとおもえる。

しかしながら、わたしは、その要請に答えられなかったということで京都学派の思想を棚上げしてしまうことはできないとおもう。彼らが乗り越えようとした近代は戦争こそないが現在も続いており、無力感において先の大戦の折とそれほどちがった環境のもとでわたしたちは生きているわけではないからだ。もしかしたら、彼らが提出した近代のゆきづまりの形而上学は、その歴史認識自体において永遠につづく課題が秘められていたかもしれないとおもえる。

彼らの主張のおおもとを探ると、西田哲学が古典的な近代哲学である主観、客観の分離を脱却する意図を含んでおり、西欧流の「有」の哲学に対して東洋的「無」の哲学、しかも「絶対無」の哲学を対置したことがわかる。それらの思想はあわさって、英米の自由主義的個人主義、ソ連の共産主義的普遍主義、ドイツ・イタリアの全体主義的民族主義を統一し、総じて、東西両文化の並存、対立、止揚の志向をもったイデーとされた。そのなかには資本主義の止揚も当然のように含まれていた。これら「世界史の哲学」と呼ばれる思想が国体思想をきっかけにして発展したものであるとみなされたのだが、必ずしも国体という枠組みにとらわれることなく、はじめは特殊的世界の構成物にすぎないが、彼らがやがて結合して全世界が融合して世界の新秩序がつくられると信じられたのである。東洋の諸民族はいままで欧米の帝国主義によって植民地化され蹂躪されてきた。そのためそれぞれの世界史的使命を忘れかけていたのだが、いま、東亜の諸民族は一丸となって、その桎梏を破り、東亜文化の理念を掲げて世界史的使命の先頭に立って奮起しなければならないという合言葉が大東亜戦争を根拠づけたのである。

こうして「近代の超克」論議は、太平洋戦争の戦勝気分の中で人類史の新たな1ページを飾るものとして、あたかも呪術的なスローガンのように流布されるようになった。そこには単に理屈の上だけではなく、一種の心情的なロマン主義が裏側から支え、国民意識の中に浸透していく地盤があったことになる。しかし「近代の超克」論議は、当然、俎上にあげられるべき資本主義の止揚という観点からみても、国家独占資本主義の再編成以上の意味をもたなかったと批判できる。その理由は、彼らが超克されるべき近代哲学に対する理解が一面的であり、さらには歴史的現実と脈絡がつかない抽象論議に終始したことがあげられる。つまり、これらは社会有機体説にもとづき、近代哲学の古典的な啓蒙主義に対するロマン主義的な揺り戻しとして位置づけられるのであり、決して近代哲学を乗り越えたといえるような代物ではなかったという評価につながってくる。しかしながら、わたし

私たちは彼らの歴史哲学が国体論と踵を接する地点において、より深めた議論をしなければならぬとおもう。

## 7 方法としてのアジア

《日本の場合ですと、構造的なものを残して、その上にまばらに西洋文明が砂糖みたいに外をくるんでいる。中国はそうでなくて、デューイの考え方によれば、元の中国的なものは非常に強固で崩れない。だから近代化にすぐ適応できない。ところが一旦それが入って来ると、構造的なものをこわして、中から自発的な力を生み出す。そこに質的な差が生じるということです。表面は混乱しているけれども、西洋人の目から見た近代性という点でははるかに中国のほうが日本よりも本質的であるということを言っています。》『方法としてのアジア』 竹内好著

竹内が「方法としてのアジア」という手法を選んだことは、アジア主義を鼓吹しているのではなかった。要約すると、わが国の歴史を考える際には、アジアの国々、とりわけ中国の歴史を鏡に映してみる必要があるということではないかとおもう。実際に、明治以降の日本が、西洋文化を取り入れて近代化したこと自体正しいと認めているのだが、近代化が技術論に終始しており、技術をうみだす精神の問題まではとらえられていなかった。ただひとつの近代の型だけに固執しているのがダメだという論旨なのである。それを唯一の型にしてしまったときに戦争という誤った道を歩んでしまった。

そこで、竹内の「方法としてのアジア」の意義は、より政治的、文化的に実践的な課題になってくる。まず、西洋諸国にしてもアジアの国々にしても人間そのものの価値は変わらず、普遍性として人間類型は等質というのが前提になっている。それは世界共通性なのである。ということは、西洋を進歩させた優れた文化価値としての自由や平等は世界的に実現されなくてはならない。ところが、現実には西洋の文化価値がアジア諸国に対して武力をともなって強引な形で入ってきた。そのため、自由や平等というのは西洋諸国ではそのものとして実現されているかもしれないが、一方のアジアにおいてはそれが享受されているとはどういおもえない。なぜなら、植民地支配を前提にしたうえでは、自由、平等にはならないからである。

その際、アジア人の側では、この普遍的価値である自由や平等を全人類的にいきわたらせようとする場合、西洋の力ではどうしようもないとおもっている。西洋の力だけでは不可能だとみきわめているのである。それなら、西洋的な文化価値をより大規模に実現するためには、西洋を東洋によって包み直す、逆に、西洋自身を変革する、または、文化的な巻き返しをとおして普遍的な価値がうまれるのではないかというのである。それはアジアの力が西洋のうみだした普遍的な価値をより高めるために、西洋を変革するということなのである。その意味で、西洋の原理をアジアのなかに溶かしこみ、再構築する方法を模索することなのである。

こういう考え方は、一見すると、西洋に近づくことが唯一の進歩と考える進歩一元史観を否定する側面をもっているから、前述した戦前の京都学派の主張に似かよっているかにおもえる。京都学派が共有している立場は、西洋文化を吸収しながらそれを消化し、日本

精神を加味して独自の文化を創造しながら、しかも同時に一足飛びに世界史まで昇りつめることであった。この場合、重心は日本精神になっているが、アジアの精神（原理）と読みかえてもよかった。今まで西洋の文物は進んだ最高の文化と考えられてきたため、他の民族も進歩すれば必ず自分たちと同じになるはずだという傲慢な発展段階説が、西洋から世界中に発信された。だが、もしかしたら、西洋文化と東洋文化の両方の根底をさらったならば、人類の文化に広く豊かな方向性がうまれるのではないかということになった。

それは西洋文化によって東洋文化を否定するのではなく、また、東洋文化によって西洋文化を否定するのでもない第三の世界史観のあり方につながっているという確信があったにちがいない。この西田幾多郎の考え方は、当時、世界史の視線のなかに、東洋がせりあがってきた実感を背景にしていた。むろん、それはわが国がアジアの優等生として急速な近代化を進め、世界の強国としてのしあがってきたという時局認識によって促されたものだ。つまり、あの時代において、ほんとうの世界史的哲学が自然に萌した最初の地盤がわが国においてみいだされることになったのである。彼らはそれを、「八紘一宇」の精神にたらなるといっているが、これは国家主義でもデモクラシーや世界主義でもないなものかを指す普通名詞にほかならなかった。

わたしたちはこの京都学派の主張に、わが国の「近代の超克」の先駆けをみるべきであろうか。もし、その近代が西洋世界の領土、経済、文化の拡張によって世界の歴史が変形し、列強による非西洋世界の植民地化の拡大の代名詞であれば、これに対して東洋の立場の突然の出現によって、近代の限界を象徴的に照らし出したという意味ならば、ポスト・モダンとみえなくはない。しかし、このような西洋近代が描き出した世界像への反発を強める契機になったのは、東洋の果てから遅れて出発した近代化した日本という近代のねじれた自己表現でしかなかったのである。いわば、西洋近代に対抗しているのは遅れた東洋の近代そのものでしかなかった。それなら、わが国の立場の実現が哲学的思弁から漠然と予期されるものでしなく、わたしたちの実感に響きあうものとしてはどう受け入れられなくなってくる。

わが国の近代化の変形を語っている竹内は、京都学派のように、アジアの原理と西洋の原理の観念的統一というようなことをやってのけたわけではない。アジアの原理と西洋の原理を戦わせて、そこから新たな原理をつくりだすことだけを目的にしているのである。外見は日本の近代化は華々しくみえる。しかし、日本には封建的な土壌が残っており、その封建的なものと近代的なものが戦われることなく共時的に同在しているのである。そのため、近代は表面だけのものにおわって、真に近代的なものとはいえないのである。それで国民心理の基礎工事からやり直さなければならないといっているのである。

竹内にとって「近代の超克」論議は、唯一、アジアの原理にもとづき、方法としてのアジアの明確さと結びついた。しかし、竹内の理解では、決して近代そのものを悪と呼んでいるのではない。わが国の近代主義の二重性の裂け目からウルトラ・ナショナリズムの反動をつうじて戦争を引き起こし、知識人の総転向や思想放棄をうみ、いびつな歪曲をうんだとしているのである。優等生意識のいびつさ、指導者意識のいびつさが戦争をうんだ元凶であるというのである。また、アジアの植民地諸国の味方をしているかにみえた擬似アジア主義が大東亜共栄圏の膨張主義に重ねられたのである。そして、そのおおもとは近

代日本は内面的な自己分裂をはらんでいることが関係していた。日本人は近代的自我と封建的な自己の落差にたえず傷つけられていたのである。それらを超克するために竹内が選んだのは、西洋に抵抗するアジアという方法だったのである。

考えてみると、これは現実の地理的アジアというのではなく、西洋に抵抗するアジアという一つの「理念」型であった。地理的に離れた西洋とアジアをもう一度、歴史時間のなかで組み立てなおすのが、アジアの抵抗とナショナリズムの理念であった。そのため、その理念を実行するために、孫文や魯迅を承継した毛沢東に西洋への抵抗の具体的あらわれを期待した。マルクス主義の土着化をもたらした毛の根拠地の理論がそれであるが、竹内は全面的に賛意をあらわしながら毛の根拠地論を解きあかす。

「自己を固執するものが、批判をおそれ、自己をいつわる。自己を固執するものは、根拠地をもたないものであり、つまり真の自己をもたぬものである。固執するのは、失うことをおそれるからだ。力を一方的に考え、相対する均衡においてとらえぬからだ。自己を固執し、それを固定的なものに考え、占領地を拡大するように一方的な力作用によって自己主張を行うからだ。失うことを絶対に失うことと考え、失うことが得ることである真の独立の意味を自覚しないからだ。一切のものを失ったときに、かれは一切のものを得た。つまり、力の弁証法という根本原理をつかんだ。この体験の上に立って、かれは自己改造を革命家に不可欠の前提として要求しているのである。したがって、自己改造の根本は、自己主張を捨てることにある。それが真の自己を獲得する道だ。学生は学生服を脱げ、それによって真の学生になる。インテリはインテリの特権を捨てろ。それによって真のインテリになる。人は一度は無所有者の体験に立たねばならぬ。」『評伝 毛沢東』 竹内好著

竹内の目をとおしてみた毛の思想とはこのようなものだ。1942年におこった三風整頓運動のなかで、毛沢東はセクト主義、主観主義、形式主義の悪弊を警告して中国の倫理体系をつくったとされている。これには毛が根拠地の建設をすすめた体験思想が織り込まれていた。ここにあらわれているのは、革命家の倫理が高らかにうたわれているだけではなく、戦略論でも戦術論でもあった。すなわち、おのれの我をつらぬくことはおのれを獲得することではない。おのれを捨てることが結局、おのれを獲得する自己改造の道だというのである。自己改造の根本はおのれを無にして、有を得ることである。インテリは、いままでの知識人としての自分を白紙にもどして、一度は自分無所有者の地位に落とさなければならない。学生も学生らしくなくなっはじめて、ほんとうの学生になるというのである。この論理のなかでは有と無の弁証法をつうじて形而上学的な意味づけがおこなわれていることになる。

哲学的にいうと、自分を無にして大きな有を獲得する方法というような意味に読み取れるが、自己を無にして、あるいは自己主張もせずに、個を大きな世界のなかに埋没させて得られるものとは何だろうか。この自己否定の論理は、竹内のいう西洋をアジアによって包み直す、逆に、西洋自身を変革する、西洋の原理をアジアのなかに溶かし込み、再構築する方法とどう関連づけられるのであろうか。わたしには、毛の着想は自己否定をつうじて自己を無限に下位において、擬似平等感をもたらす共同体の倫理観にしたがわせる思想

にみまがうかぎりにおいて、アジア的専制主義の権力支配のあり方とつながっているように見える。具体的に言えば、毛が貧農に対するシンパシーを度外れに拡大したため、農民は何に対しても革命的であるというような教条主義におかされていたのである。そして、ヘーゲルの歴史哲学があげた、ただ一人の自由とその他多くの奴隷の支配というものを彷彿させるのである。これは奴隷の論理を排するという竹内の方法とどうすればつながるのか疑問視しないわけにはいかない。おそらく、こういう毛にみた自己否定の論理とは明らかに脈絡がつかないものとおもえる。それだけではない。

毛の共産主義に同調する竹内には、なにより、ナショナリズムそのものに関する最終的な価値評価がおこなわれていない。永久革命の末、たどりつくべき思想としてのナショナリズムの帰着点のことが不問に付されているのである。結局、竹内の思想はウルトラ・ナショナリズムによるあやまった道に踏みまよう以前の透谷や啄木にあったナショナリズムを取り戻すという範囲にとどまっており、アジアをアジアたらしめる抵抗とはナショナリズムという思想方法と軌を一にしているのだ。これは竹内にとってウルトラ・ナショナリズムにおちいる危険性をはらんでおり、火中に栗を拾うものであったかもしれないが、反面、ナショナリズムそのものを既成事実として認めてしまった、というより積極的な意味づけをして、功罪について結論をひきだすことができなかつたのである。そのことが毛評価によって一挙にあらわれたとみることができる。

わたしは、たとえ、近代日本の歪みについて中国の近代化との差異をきわだたせる竹内の方法を認めたとして、毛のマルクス主義にもナショナリズムによる革命戦争の主張についても評価することができない。竹内好は中華人民共和国が成立（1949年）したとき、次のようなことを述べている。

《中華人民共和国は売国的官僚資本家と大地主を除いて、農民、労働者、民族資本家、および中間層の広汎な諸階級の連合政権である。したがって、革命の性質は、共産主義でも社会主義でもなく、新民主主義革命とよばれるものである。…中略…新政権が諸階級の連合であり、いろいろの党派やグループの合作であるとしても、その中心が中国共産党であり、したがって何といたっても中共の発言力が強いことは否定されない。そこで、連合政権というのは表面の擬態であって、実際は中共の一党独裁ではないか、という疑いがおこる。この疑いは一応もつともであるが、私ははっきり、そうでないと主張する。なぜなら、中共は、これまで一度も独裁をやろうとしたことがなかったばかりでなく、各機関の選挙で党員が定数を超えることを制限し、厳重にそれを守ってきたからだ。》『新中国の精神』竹内好著

毛沢東が『新民主主義論』を発表したのは1940年であるが、それは毛沢東思想がはじめて体系化され高く評価された最初の論文であり、マルクス主義の民族化とか土着化と呼ばれた。竹内は「新民主主義」はすばらしいと讃嘆し、中共は最高綱領と最低綱領をもっており、社会主義、共産主義を示す最高綱領は、人民の意志によって自由にきめられるというような楽観的な見とおしを披歴したのである。抗日戦争中の民族統一戦線は、戦後、共産党によって人民民主統一戦線という形で新民主主義を実現した。竹内は、新民主主義

は「人民民主主義独裁」を意味していたが、それこそ自由を奪うものでなく、自由を与えるものと認めないわけにはいかないという。それは人民革命と呼ばれているが、人民革命は植民地解放と社会革命の結合であったことになっている。

毛は『新民主主義論』のなかで中国の社会を植民地的な性質をもっているとしている。外国のブルジョアジーと本国の軍閥、官僚資本家、封建地主階級は互いにむすびついて、中国の人民を圧迫している。したがって、帝国主義と半封建勢力との対決が中国革命の対象になった。この敵をたおして独立した民主主義社会を実現することが中国革命の目標になったのである。つまり、中国革命の当面の目標は、民族の独立と完全な民主主義の実現である。しかし、中国の革命はプロレタリアートを指導階級とし、これに農民、革命的ブルジョアジー、その他あらゆる民主主義的勢力が連合した共同戦線でなければならないとされていた。この新しいブルジョア民主主義革命を新民主主義革命と呼ぶのである。毛沢東はその新民主主義革命を孫文の革命事業の正当な後継と自認した。ただちにプロレタリア社会主義革命でなく、あくまで民主主義革命である。ただし、国際的にみた場合には世界的なプロレタリア社会主義革命なのである。これはレーニンの「労働者と農民の革命的民主主義独裁」とスターリンの「四階級ブロック」論を直接に受け継いだものであった。

それまでの中国の革命の歴史はジグザグな道のりだった。中国共産党は1921年に成立したが、このときからすでに中国革命の性質について当面の目標が社会主義革命ではなくてブルジョア民主主義革命だとしていた。毛沢東はとりわけ農民の革命的エネルギーに着目し、軍事上、経済上劣勢な植民地が独立する課題にとりくんで発見したのが根拠地の思想である。地主から土地を無償で没収して、直接耕作者である農民に平等に分配する政策をおこない、占領地を着々と広げつつ土地解放を推し進めることによって根拠地を無限に拡大することができた。こうして農村の力を結集して、農村により都市を包囲してそのあと都市を手中におさめた。こういう土地の分配の思想は、毛沢東が共産主義者であったからできたと思われられるのであるが、その前、孫文にもあっただけではなく民族の伝統意識のなかにあったといわれている。

そして、日本の帝国主義の侵略があらわになった1937年の段階で、中共と国民党との合作（第二次国共合作）がおこなわれ、抗日民族統一戦線がつくられた。この民族統一戦線の哲学的基礎になったのが『矛盾論』であった。国民党は軍事力が圧倒的に優勢な敵に対して単独で対抗できるとおもっていなかった。それにひきかえ、毛沢東は敵の圧倒的な軍事力を認めながら、戦力の不均衡は不利な条件ではなく、有利な条件に転化できると考えた。民衆の生活を改善し、圧迫をとりのぞくことによって、無限の戦力がうみだされると信じられたからである。

こうして、共産党は解放区を次第に増やすことができはじめた。解放区とは日本軍の侵攻にともなって国民党軍が敗走したあとに、民衆のあいだから自然発生的に行政組織や自衛集団がうまれた地域だった。国民党が見捨てた地域で、農民の立ち上りを助けることによって共産党の勢力ますますは拡大していったのである。解放区では農村の人的、物的改善が進行した。その改善は共同経営の方向に進むようになり、次第に協同組合の形態を整えていく。小作人は独立自営農民となるが、孤立した排他的な独立自営農民でなく、同時に新しい共同体の一員になった。そして、戦争の終結と国民党軍との内戦をくぐりぬけ、

共産党の勝利に導いたのである。1949年に中華人民共和国が誕生したが、それは孫文にはじまる革命運動の帰着点であった。

わたしが、なぜ、中華人民共和国の成立時の状況を述べたかという、その段階においてすでに、のちの党絶対化や毛の個人崇拜をまねく毛沢東の理論そのものの誤りが伏在していたからである。人民民主国家である中国では人民民主独裁という言い方をしており、この言葉は二面性をもっていた。ひとつは、国家内部の反動階級、反革命分子、反抗する搾取者に対して逮捕し、裁判し言論の自由を与えないことができた。これが独裁の側面である。そして、もう一方は、人民内部においては民主主義を実行することであり、言論、出版、結社、デモなどの自由を認めることは憲法にも定められている。これが第二の側面である。そこでは国家機関は人民に依拠しなければならず、人民に奉仕しなければならぬと規定されている。毛は独裁の根拠を次のように説明している。

《誤りを犯した同志が、自己の誤りを正すことができれば、それは、敵対性のものに発展することはありえない。したがって、党は誤った思想にたいして、きびしい闘争をおこなわなければならないが、同時に、誤りを犯した同志については、自覚の機会を十分に与えなければならない。こうしたばあい、行きすぎた闘争が適当でないのは明らかである。だが、誤りを犯した人が、その誤りに固執し、それを拡大していくならば、こうした矛盾も、敵対性のものに発展する可能性がある。》『矛盾論』 毛沢東著 小野和子訳

こうして、人民民主国家は「独裁」と「民主主義」を二側面に使い分け、互いにまったく別のもので解釈することになった。毛沢東によると「悪い分子」と「違法分子」はちがっており、前者が敵であるのに対して後者は人民である。その際「悪い分子」は「民主主義」と無関係に法の制約を受けない徹底的な暴力の行使の対象になるのである。敵と人民の間の矛盾は敵対的で、人民内部の矛盾は非敵対的矛盾である。その矛盾は、みかけの矛盾の衝突の有無で敵と人民を区別する。そうすると、独裁の面では敵に対する暴力の行使は「民主主義」と無関係な法の制約を受けないものになってしまう。敵と敵でないものが毛の基準で判定されるならば、人民はなんとしてもみかけの衝突を起さないようにしなければならない。もし、そのような衝突をおこすなら法の制約をうけないで、敵と認定されて収容所にいれられてしまうのである。こういう形式論理的な矛盾論を実際に適用するなら、資本主義の自由主義国家にもおよばない法治国家ができあがってしまう。こうしてプロレタリア文化革命における「紅衛兵」の暴行やテロルは、この毛沢東の理論によって正当化されたのである。

また、毛は「正義」の戦争と「不正義」の戦争の区別という言い方をしている。これを矛盾の二面性のように解釈すると、植民地国家の帝国主義国家との戦争は敵対的な戦争であり、植民地相互の戦争は非敵対的な戦争ということになる。そして、アメリカ帝国主義とその手先に対する革命戦争を開始しなければならないとする。しかも、たとえ核戦争がおこったとしても、帝国主義国が滅亡するだけで、人類が滅亡することはないというような暴論を吐いているのだ。そして、植民地支配からの解放は革命戦争でしか解決されないという論法なのである。それは中国の大国ナショナリズムをおおいに煽った。彼の

戦争観では、「進歩的」か「反動的」かによって、また、「人民の歴史に役立つかどうか」という規準に照らして戦争の善悪が判断された。

これはある意味では、片一方で語られている戦争にまつわる「おそろしい」、「むごたらしい」、「悲惨」という大衆の一般感情と背馳する考え方である。それにもかかわらず、あたかも「正義」の戦争があり、それに反して「不正義」の戦争もあるというようなスターリンにおとらぬ無機的な論理が毛の戦争観に移入されており、ほとんど限りなく戦争に関する信仰告白に近づいているかにみえる。なぜなら、毛の視界は、人類史の将来から圧縮した現在の時間を覗きみているような目的意識をもっているから、戦争の論理として主観的に自分の方がより「進歩的」であると信じたり、また、「人民民主主義」の目的性を相手より先に宣言した方が、「正義」の戦争のイニシアティブをとるような盲点をつくってしまうからである。ここにある「正義」、「不正義」の論理の倒錯が、社会主義のための戦争という目的と手段の論理として永遠の今を象徴するのはあきらかだった。わたしたちが、社会主義あるいは民主主義のための戦争ではなく、戦争をひきおこすあらゆる条件を無効にしまうこと、すなわち、戦争を防ぐこと自体が目的であることに気づくには、まだまだ多くの時間を要することは疑えない。

そして、この場合、わたしたちが肝に銘じなくてはならないのは、戦争というメカニズムによって、抑圧は究極的な姿をとることである。戦争こそが目的としている究極の抑圧手段であり、奴隷を奴隷たらしめる手段なのである。権力の内部に対する抑圧と外部の競争のメカニズムを分析すると、権力の二つの闘争とは、ひとつは自身が支配する人々に対する闘争であり、もうひとつが自身の競合者に対する闘争なのだが、それらは互いに結びつき油を注ぎあう関係にある。なぜなら、外部で得られた勝利によって、その権力により多くの威厳を与えることで、内部の結束を強化するようになる。これに加えて、奴隷は主人の成功に自らの命運がかかっているかのようにおおいこみ、外部の権力の競争関係のなかで配下の奴隷たちも自然と結束をはかるのである。ところが、さらに外部での権力の勝利を期するためには、権力は内部に対してより抑圧的にならざるをえない。この抑圧を持続するためには権力者はさらに外部との競争に向かうことになる。こうして、外部は内部を支え、内部は外部を支えるという循環が繰り返されることになるのである。これを時系列に並べると、権力を支点にして外部の敵と内部の敵の三角関係が成立し、それらが相互に二つの相手を支える構図になる。

このメカニズムを奴隷の立場（内部の立場）からみるとどうなるのか。奴隷が外部の権力から自衛するのは、みずからの抑圧的権力によく服していなければならない。そのため、内部の権力が奴隷に対して居直り続けるには、外部の権力との紛争を煽り立て続けなければならないのである。こうして奴隷の内部の権力に対する関係は悪循環をなして、奴隷は主人に対していつまでも服従しなければならない。こういう抑圧のメカニズムに反対するには、権力の無化、つまり平等という旗印しかないのである。この場合、権力が人民政府と名乗っていようと関係ない。革命戦争を含めてあらゆる戦争は、このナショナリズムのメカニズムにおいて、権力が大衆に対する究極の抑圧手段として働くことは自明なのである。

現在のどのような戦争でも、「義」としての「民主主義」をふりかざし、ナショナリズム

を煽って、敵国は「善」を挑発する限りなく「悪」に等しい存在と決めつけることに変わりない。しかし、この場合、「善」と「悪」は容易にひっくりかえるものなのである。そして、「善」と「悪」と人々に語られる戦争にまつわる「おそろしい」、「むごたらしい」、「悲惨」などの一般感情は、同一平面に並べられたものではなく、ヒエラルキーをもった三角形の台座に張りつけられる。このため、この一般感情は「善」の側からも「悪」の側からも介入されることで、「善」、「悪」とも一般感情を通じて無限に自己増殖することができるのである。

わたしたちは、毛やレーニンとちがって、戦争に「善」や「悪」の二元的倫理観を結合することを拒否すべきだとおもう。だから、帝国主義戦争はもちろん、革命の過渡期には不可欠であると口実をもうけておこなう革命戦争も無条件に「悪」とおもわなければならないのだ。竹内は、せっかく、近代主義＝進歩思想が蓋をしてしまっていた民族の問題、ナショナリズムの問題の重要性を掘り起こしたものの、結局、それが対決すべきものとしての展望をひらくことができなかつた。そして、竹内は、戦後いち早く、わが国の近代文化の変形を指摘し警鐘を鳴らしたのであるが、中国との対比を注視すればするほど、毛の民族革命論に足元をすくわれることになったとおもえる。

#### <参考文献>

- 『竹内好全集』 竹内好著 筑摩書房 1980年
- 『日本とアジア』 竹内好著 ちくま学芸文庫 1993年
- 『世界の名著 孫文 毛沢東』 中央公論社 1969年
- 『近代日本政治思想の諸相』 橋川文三著 未来社 2004年
- 『ナショナリズム』 橋川文三著 紀伊國屋書店 2005年
- 『昭和維新試論』 橋川文三著 講談社学術文庫 2013年
- 『現代政治の思想と行動』 丸山眞男著 未来社 2002年
- 『反ナショナリズム』 姜尚中著 教育資料出版会 2003年
- 『ナショナリズムの克服』 姜尚中、森巢博著 集英社 2002年
- 『日本のナショナリズム』 松本健一著 筑摩書房 2010年
- 『竹内好論』 松本健一著 岩波現代文庫 2005年
- 『<癒し>のナショナリズム』 小熊英二、上野陽子著 慶応義塾大学出版会 2003年
- 『ナショナリズム』 浅羽通明著 筑摩書房 2004年
- 『アナーキズム』 浅羽通明著 筑摩書房 2004年
- 『唯物史観と国家論』 廣松渉著 講談社学術文庫 1989年